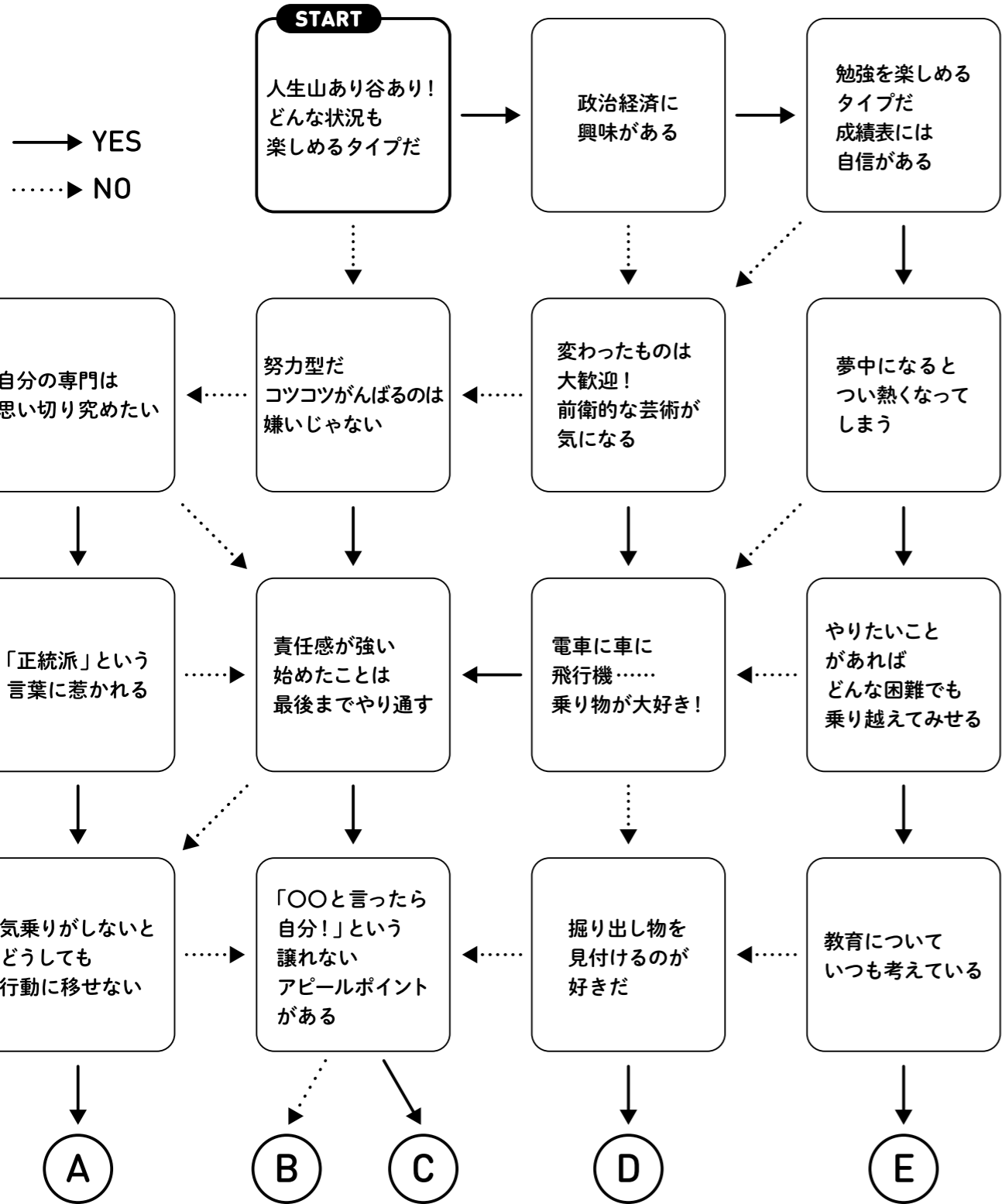


音楽診断

第4回 名指揮者編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第4弾。今回のテーマは名指揮者です。偉大な功績を残したマエストロたちの中から、あなたに似ているタイプの指揮者をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生
Text = Haruo Yamada



あなたのタイプは?

A 気まぐれでも天才肌、オタク的なこだわりも カルロス・クライバー

大指揮者エーリッヒ・クライバーの息子として生まれ、アルゼンチンに渡る。スイスの工科大学に入るものの、親の反対を押し切って、音楽の道に進む。一度も音楽監督や首席指揮者のようなポストには就かず、客演で通す。ウィーン・フィル、バイエルン州立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、スカラ座など、超一流のオーケストラや歌劇場からのオファーが絶えなかったが、彼の出演はともに限られていた。気まぐれな天才肌の指揮者と思われがちだが、音楽づくりは緻密でよく練られている。晩年は限定された十八番のレパートリーを繰り返した。その躍動的な音楽と踊るような優美な指揮姿が世界の聴衆を魅了した。



B 派手好きな帝王 ヘルベルト・フォン・カラヤン

カラヤンは、ベルリン・フィルの芸術監督を30年以上務め、ウィーン国立歌劇場芸術監督を兼務していた時期もあり、まさにヨーロッパの音楽界に君臨した。ゆえにしばしば「帝王」と称された。指揮者としては独裁的であったが、オーケストラの極意は室内楽的なアンサンブルにあると心得ていた。目をつむってタクトを振るその指揮姿は洗練の極み。同じオーケストラを何年にもわたって磨き上げ、メインのレパートリーは何度も再録音を行って、自らの美学の深まりを後世に遺そうとした。スピード狂で、スポーツカーを運転し、飛行機の操縦もできた。録音や録画の新しいテクノロジーにも大いに興味を示し、それらへの貢献もした。



C 職人気質の大器晩成型 朝比奈隆

東京生まれ。旧制高等学校時代にヴァイオリンを始め、京都大学交響楽団で指揮活動を開始。京都大学法学部を卒業後、阪急に勤務したこともあったが、京大に戻り、音楽活動を本格化。第二次世界大戦中は、満州や上海のオーケストラを指揮。1947年に関西交響楽団(今の大阪フィルハーモニー交響楽団)を創設。亡くなるまで大阪フィルの音楽総監督を務め、同団を鍛え上げた。音楽的には大器晩成型。コツコツ積み上げる職人肌の指揮者だが、剛毅でスケールの大きな音楽をつくり上げた。19世紀生まれの巨匠の影響を受け、ベートーヴェン、ブルックナーなどのドイツ音楽を得意とした。晩年には、シカゴ交響楽団の定期演奏会に招かれ、ブルックナーの交響曲を指揮。



D 神童から鬼才に成長、気性の激しい(?)一面も ロリン・マゼール

5歳でヴァイオリンを始め、8歳で指揮デビューした神童。1960年に史上最年少でバイロイト音楽祭を指揮。1982年にはウィーン国立歌劇場総監督に上り詰め、指揮者としてのキャリアの頂点を極める。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでは、ヴァイオリンを弾きながらの指揮も披露。しかし、ベルリン・フィルでカラヤンの後任になれず、彼らとの演奏会を全てキャンセルする一面も。作曲家としてはオペラ『1984年』などを遺す。晩年、キャッスルトン音楽祭を創設し、オペラの上演や若手の指導に努めた。決して気難しい芸術家タイプではなく、大見得を切る派手な演奏も。サービス精神旺盛な人であった。



E 情熱的でフレンドリー、マルチな才能で大活躍 レナード・バーンスタイン

作曲家、指揮者、ピアニスト、司会者、教育者であり、クラシックだけでなく、ミュージカル、ジャズにも作品を残すなど、まさにジャンルを超越したミュージシャン。ユダヤ系アメリカ人の実業家の息子として生まれ、ハーヴァード大学で学ぶ。親の反対を押し切り、音楽家に。1969年にニューヨーク・フィルの音楽監督を辞してからは、フリーランスとして世界の一流オーケストラを客演。その情熱的な(時には飛び跳ねることも!)指揮が一世を風靡した。「ヤング・ピープルズ・コンサート」やPMF*の創設など、教育活動にも尽力。作曲では『ウエスト・サイド・ストーリー』が最も知られているが、交響曲やオペラも残した。フレンドリーな性格で、誰もが彼のことを「レニー」と呼んだ。



*パシフィック・ミュージック・フェスティバル: 札幌で創設した国際教育音楽祭。

山田治生(音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ〜大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人〜ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。

